

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16722

研究課題名(和文)『白氏六帖』収載対偶の全容解明とその作者及び統纂類書に於ける受容の研究

研究課題名(英文)An elementary analysis of antitheses in "Baishi liutie"

研究代表者

大淵 貴之(OBUCHI, Takayuki)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：40614764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、『白氏六帖』収載対偶句の作者を解明すべく、該書の由来と基本的性格について考察を深めた結果、該書は白居易による書判拔萃科対応の資料集成に基礎を持つ政務用類書であるという新たな仮説の提起に至った。白居易自作説の傍証の一つと考える。また、詩作参考書としての類書の具体的利用実態について、日本近世の詩僧文之玄昌の詩作を例に明らかにした。この発見は、宮崎県串間市と連携した文之玄昌研究の新たな展開につながった。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to elucidate the author of antitheses contained in "Baishi liutie" through consideration of this book's origin and basic character. I raised the new hypothesis: it is a reference book for political use, based on example collection which is compiled by Bai Juyi for his public official examination. I consider that antitheses are also written by him. Regarding this point, however, I need a style comparison between them and Bai Juyi's judgements.

研究分野：中国古典文学

キーワード：類書 白氏六帖 対偶 文之玄昌

1. 研究開始当初の背景

古代中国には、後に「類書」と総称される一群の典籍が存在する。それらは皆、その編纂当時に存在した各種文献を広く蒐集し、森羅万象の事物ごとに設定した部立てに従って分類、収録する体裁をとる。時に分かりやすさを旨として、「古代中国の百科事典」と説明されることもあるが、今日の百科事典とは異なり、各項目の説明が書き下ろされることはなく、上述の通り先行文献の採録によって構成される点に最大の特徴がある。

一方、白居易(字は楽天)と言えば、中唐を代表する文人であり、その詩文集『白氏文集』収録の諸作品が、後代の中国文学のみならず、平安朝以降の我が国の文学にも極めて大きな影響を及ぼしていることは、周知の事実である。この白居易の個人的編輯によるとされる類書が現存し、その名を『白氏六帖』という(現存する代表的版本の書名としては『白氏六帖事類集』が知られる)。

白居易については、日中両国に於いて盛んに研究がなされ、特にその詩についての研究は蓄積が厚い。白居易が、第一に「詩人」として捉えられてきたことがその背景にある。『白氏六帖』についても、詩人白居易の個人的編輯物との認識のもと、従来、白居易の詩作参考書として捉えられてきた。津田潔「新楽府と白氏六帖(稿)上」(『漢文学会会報』第28輯、国学院大学漢文学会、1982年)は、白居易詩の典故の解説に『白氏六帖』が有用であるとの主旨を説く。

従来、同様の主張に異論が唱えられることがなかった一方で、実際に該書を活用した白詩読解の研究が進展することもなかった。筆者が、『白氏六帖』と白居易詩との間の密接な関連性に疑問を抱いた一因である。

ところで、『白氏文集』によって伝わる白居易自作の判(司法、行政の実際政治、或いは倫理、経義上の諸問題についての判断を示す文章ジャンルの一つ。四六駢儷体による)の断片が、『白氏六帖』に看取されるとする岡村繁氏の指摘(『白氏六帖』に見える白居易の文』、『新釈漢文大系』季報 111〔明治書院、2011年〕)を契機として、筆者は、現存する白居易判101道の自作表現を『白氏六帖』中に検索し、総計100例の対偶句を白居易判の断片として検出し、報告した(拙著『唐代勅撰類書初探』第7章〔pp.170-204、研文出版、2014年〕を参照)。その際、現存白居易判との関連を指摘できたもの以外に、作者不詳の対偶句が多数存在する事実を見出していた。

上述の詩との密接な関連性に対する疑念と相俟って、筆者は論文「『白氏六帖』の特質」(『中国文学論集』43巻、九州大学中国文学会、2014年、pp.95-104)を草し、『白氏六帖』は、白居易判と密接な関連を有すること、作者不詳の対偶句もまた白居易自作の判の断片である可能性があること、該書は詩作参考書ではなく政務用類書であること、以上三

つの仮説を提起するに至った。

2. 研究の目的

かかる背景のもと、本研究は『白氏六帖』に収録される作者不詳の対偶句について、以下の諸点の解明に迫ることを当初の目的とした。

(1) 作者不詳対偶句の総数及び分布状況

『白氏六帖』に収録される作者不詳対偶句を全30巻にわたって、調査、抽出し、文献データとして取りまとめる。

(2) 白居易自作の可能性

従前の研究で既に白居易自作の判との関連性を指摘できた際の手順をも踏まえて、作者不詳対偶句と白居易判及び他の文体作品との関連性・近似性の有無を明らかにし、白居易自作の対偶句か否かを考察する。

(3) 『白氏六帖』統纂類書等に於ける作者不詳対偶句の評価と位置付け

『白氏六帖』を継承、発展させた統纂の諸類書において、収載対偶が如何に取り扱われたかを調査する。これにより、作者不詳対偶句に対する後世の文人の理解を把握し、(2)の作者解明に資する傍証を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

上記の(1)～(3)の目的達成のため、それぞれ以下の研究方法を採用した。

(1) 善本とされる南宋紹興年間刊本『白氏六帖事類集』(傳増湘旧蔵、天理図書館蔵本。新興書局、1969年影印)を基礎に北宋刊宋元通修・元末明初印『白氏六帖事類集』(陸心源旧蔵、静嘉堂文庫蔵本。古典研究会叢書・漢籍部 40～42、汲古書院、2008年～2012年影印)及び宋刊『新雕白氏六帖事類添注出経』(台湾国家図書館蔵本の影印資料をJSPS科研費24720165の助成により同館より入手)を参照しつつ、対偶の抽出を行なう。

(2) 対偶句を収載する『白氏六帖』そのものについて、他の唐代類書との比較から判本文との関連性を更に明らかにする。作者不詳対偶句の文法的構造に着目し、特に虚詞の用法の特徴を白居易自作判文のそれと比較対照する。

(3) 『白氏六帖』を継承、発展する形で編纂された(南宋)孔伝撰『白孔六帖』、(明)俞安期撰『唐類函』、(清)張英・王士禛等奉勅撰『淵鑑類函』の各統纂類書、並びに『古今事文類聚』等の南宋私撰類書における『白氏六帖』収載対偶句の取り扱いについて、事例調査を行なう。

4. 研究成果

上述の「2. 研究の目的」に記載する当初の目的について言えば、(1)の対偶句抽出作業を予定通りに遂行するに至らなかった点で不足を認めなければならない。未だ点校本さえ世に問われない『白氏六帖』であれば、基礎的な文献の整理作業も極めて意義あることである。一方で、本研究実施期間の多くを目的(2)・(3)に係る理論的研究に費やしたことで得られた成果も大きい。研究途上の予期せぬ発見の成果も含め、以下に概要を述べたい。

(1)『白氏六帖』の由来及び基本的性格の更なる解明、並びに作者未詳対偶句の白居易自作説の傍証提出

筆者は過去の研究で、『白氏六帖』全30巻にわたり多数の対偶句が収録されること、そのうちの100例が現存する白居易判中の対偶句と一致するか極めて類似することを明らかにし、他の唐代類書に比して統治行為に関わる部立てが詳細であることと併せて、該書を政務用類書とする仮説を提起していた。その際、未解決のままであったのが、唐令の収録状況に関する問題である。唐令千五百数十条の全体に対し、現状の31条の採録はあまりに少数というほかない。種々の政務に従事した官僚白居易の言わば「実務必携」と理解するには疑問が残るのである。実務対応の政務用類書となれば、更に多数の唐令を網羅的に各部立てに収録していても不思議ではない。

この点について本研究では、白居易の模擬判「百道判」と密接な関連を持つ多数の対偶句収録という事実と併せて考えた時、唐令が少数一部の採録に止まる理由は、あくまで任官試験の書判拔萃科(判文の作成が求められる)に応ずるため準備した模擬判題の設定やそれに対する判文を構想する上で必要な唐令を、白居易が随意に抄録したに過ぎないためとの結論を得た。書判拔萃科は、実務で必要となる法令上、経義上の諸問題に対する判断能力を問う試験である。書判拔萃科に対応可能な参考資料集成であれば、それは実務に利用可能な政務用類書としても機能し得る。この点で、『白氏六帖』を政務用類書とする従前の仮説そのものは維持するものの、書判拔萃科対応の資料集成に基礎を持つ政務用類書という更に踏み込んだ仮説の構築を為すに至った。

この『白氏六帖』の成書過程に関する仮説を踏まえれば、作者不詳の対偶句についても、やはり白居易の手になる模擬判の断片と見るべき可能性が高まったと言える。

また、作者未詳対偶句の虚詞を中心とした構成上の特徴について今後更なる解明を進め、作者問題の考察を深めたい。

続纂類書に於ける対偶句の評価は、多くが作者の注記を行わないか、「白帖」・「六帖」(『白氏六帖』の省略)と示すことが明らか

となった。続纂類書の編纂者は、『白氏六帖』に収録の対偶句という事実に即した理解を示すのみであり、それらが白居易自作であると踏み込む注記等は確認できていない。

後掲〔雑誌論文〕を参照

(2) 詩作参考書としての類書の具体的利用実態の解明

収載対偶の考察には、上記(1)のように『白氏六帖』そのものについての考察が不可欠である。また、先行研究が該書を白居易の詩作参考書と評価してきた以上、それが誤認であることをより説得的に示す証左としても、類書が詩作参考書として如何に利用されたか(また如何なる体裁の類書が詩作参考の用途に適するのか)、その具体的実態の解明を期して事例研究に取り組んだ。

類書とは、先行文献の採録により構成される。ある詩を前にして、その典故表現が類書に依るのか、それとも類書がその取材源とした原典に依るのか、何れかの判断をつけて証明することは殆ど不可能に近い。鹿児島大学附属図書館玉里文庫には、室町時代末期から江戸初期に活躍した詩僧、文之玄昌の詩文集『南浦文集』が所蔵される。筆者は、文之玄昌自筆と伝わる該本中に、南宋(元に続纂)の私撰類書『古今事文類聚』に収録される複数の故事を綴り合わせる形で創作された詩を見出し得た。詩作に利用された故事の配列や文字異同、故事収録の部立てと詩作時期との関連性、多くの要素に支えられて類書の詩作への利用実態が指摘可能となった貴重な例である。本研究課題と関連した「類書と詩作」という観点のみならず、我が国の中世末期から近世初期にかけての漢学のあり方、漢籍受容の実態という視点でも興味深い発見であり、今後、文之玄昌についての研究を進めるべき価値があることを示し得た点で大きな成果があった。

後掲〔雑誌論文〕を参照

(3) 宮崎県串間市と連携した文之玄昌研究の社会への還元と新たな研究の立ち上げ

上記(2)の成果を契機として、文之玄昌の出生地に近く、文之がかつて籍を置いて漢学修養に励んだ寺でもある龍源寺とそこの学問について、宮崎県串間市校長会・龍源寺を考える実行委員会の招請を受け、串間市生涯学習課文化係の支援のもと市民対象の講演(参加者80余名)を行なう機会を得た。目に見えやすい形で、研究の社会への還元を可能とする場をご提供いただいた関係各位に鳴謝申し上げる。なお、2018年5月現在、文之玄昌に関する研究及び年に一度の市民講座の継続的实施に向けた計画が、串間市生涯学習課文化係との間で協議されており、本研究を端緒とした新たな研究の展開が期待されている。

後掲〔その他〕を参照

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

大淵貴之「日本近世詩僧文之玄昌所用詩学参考漢籍小考」

『復旦大学中国古代文学研究中心二〇一六年中日蔵漢籍研討会論文集』不分巻, 復旦大学中国古代文学研究中心, 2016年12月, pp.52-60, 査読有り。

大淵貴之「『白氏六帖』之類書属性考 兼示其作為唐代判体文研究資料的可能性」

『第五届中国文体学国際学術研討会論文集』上巻, 中山大学中文系・『文学遺産』編輯部, 2016年11月, pp.377-385, 査読有り。

[学会発表](計3件)

大淵貴之「日本近世詩僧文之玄昌所用詩学参考漢籍小考」

中日蔵漢籍研討会(国際学会)
2016年

大淵貴之「『白氏六帖』之類書属性考 兼示其作為唐代判体文研究資料的可能性」

第5届中国文体学国際学術研討会(国際学会)
2016年

大淵貴之「文之玄昌の詩作参考書」

「書物・出版と社会変容」研究会
2015年

[図書](計0件)

[産業財産権]

該当無し。

[その他](計5件)

大淵貴之「文艶蓉著『白居易生平与創作実証研究』日中両国の新資料と研究手法の活用」(書評)

『白居易研究年報』18巻, 勉誠出版, 2017年12月28日, pp.396-400, 査読無し。

大淵貴之「鹿児島市立図書館所蔵『新刊聖蹟図』について」(研究会口頭発表)

第3回書物同好者の相談并二懇談会
2017年12月16日
九州大学(福岡県・福岡市)

大淵貴之「儒僧文之玄昌の龍源寺に於ける学問について」(招待講演)

宮崎県串間市校長会・龍源寺を考える実行委員会平成29年度龍源寺を探る講演会
2017年11月8日

市木公民館(宮崎県・串間市)

大淵貴之「『霧島温泉詩稿』所収島津久光「瀧市偶成」詩に見る杜甫詩の受容」(研究会口頭発表)

第1回書物同好者の相談并二懇談会
2017年6月4日
九州大学(福岡県・福岡市)

大淵貴之「域外漢籍研究の新たなる展開 陳正宏著『東亜漢籍版本学初探』」(書評)

『東方』431巻, 東方書店, 2017年1月, pp.24-27, 査読無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大淵 貴之(OBUCHI Takayuki)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号: 40614764

(2) 研究分担者

該当無し。

(3) 連携研究者

該当無し。

(4) 研究協力者

該当無し。